

コンタクト・インプロヴィゼーションが可能とし得る自他関係についての考察ーダンス学習における学習者の羞恥に着目してー

お茶の水女子大学大学院 齋藤萌々子

1. 研究背景

コンタクト・インプロヴィゼーション（以下、「C. I.」と省略）とは、1972年にアメリカの舞踊家スティーブ・パクストンが「接触を通して可能となるコミュニケーションの探求」を即興の焦点として始めた、ダンスの即興形式である（福本 2000 他）。この形式は、西洋の劇場舞踊の文脈の中で、従来の観客の目を楽しませようとするダンスから、ポスト・モダンダンスの実験的な流れにおいて、身体そのものの在り方へと関心が向けられていく中で発展してきた。

わが国の体育科教育における C. I. の指導事例では、体ほぐしの運動やダンス・身体表現の授業の一環として、また課外活動の文脈で、高校生または大学生を対象としたものがある（岡野 2007; 麻生 2010 他）。そこでは、学習者の身体を通じた自他への気づき等が報告されているが、C. I. の活動がどのようにしてダンス学習へと繋がっていくのかについて言及している研究は少ない。

筆者は、高校生を対象とした C. I. の指導実践を通して、創作ダンスとは異なる C. I. の経験により、学習者の身体への見方に変化が生じたことに興味を持った。この変化は、ダンス学習を難しくする要因の1つである羞恥の問題を解決する糸口となるのではないかと考えた。

2. 目的と方法

本研究は、ダンス領域での指導上の難しさの1つとして指摘される学習者の羞恥に着目し、ダンス学習における羞恥の要因及び羞恥を克服するための指導法を確認した上で、C. I. の学習が可能とし得る自他関係の改善を検討することを目的とする。

本研究では、文献研究を行う。大西（2020）によると、ダンス学習における羞恥に関する研究では、構成概念の検討が不十分だと指摘されている。そこで、本研究ではまず、羞恥が生じるメカニズムを論じた文献（菅原 1998 他）を参照した上で、ダンス・身体表現の授業において学習者の羞恥に言及する先行研究 10 件等を用いて検討を行う。

3. 結果と考察

1) 羞恥が生じるメカニズム

一般的に、羞恥が生じるメカニズムとして、社会心理学の領域を参照すると、羞恥とは「重要な自己呈示に失敗することへの恐れ」である対人不

安の中の1つのカテゴリーとして位置づけられ、「他者の期待と、実際に呈示された自己像との不一致」(菅原 1998)によって生じると確認される。また羞恥は、環境や直面する課題、個人の記憶等によっても生じることが指摘されている（鈴木・庄司 2022 他）。この知見を枠組みとして、先行研究の論を整理する。

2) 先行研究にみる羞恥の要因とその克服のための指導法

ダンス学習における羞恥の要因は、先行研究より自他関係、ダンス学習に対する先入観、創作表現行為、学習環境等が確認される。自他関係に着目すると、「他者の視線」によって「見られている身体を意識すること」(濱田 2022 他)や、「他者との消極的な人間関係」(酒井ら 2021)等といった要因が確認できる。また、ダンス学習に対する先入観については、他スポーツとは異なる非競争性や身体を使って自己表現していくといった、学習者が思い描くダンスのイメージ(松本 2020 他)が要因の1つとして挙げられる。他、指導を行う教員が抱く羞恥心も、学習者の羞恥へ影響を及ぼすことが指摘されている。

一方で、羞恥克服のための指導法は、教材の改善(畑野・久山 2016 他)、環境の変更(濱田 2022 他)、指導法の工夫(古木 2010 他)等に確認できる。また、ダンスウォームアップで心身をほぐすことを主な目的としたペアワークや、握手などの身体接触を含む指導法が見られる。

このようにして、羞恥を生じさせる要因である、自他意識への高まり等を軽減させてきていることが分かる。これらを踏まえ、C. I. 特有の教材には、どのような特性があるかを検討していく。

3) C. I. における自他関係から、ダンス学習者が感じる羞恥を克服する可能性

C. I. では、基本的に2者以上での活動を行うことにより、曖昧な自他関係から明確な関係性への構築が可能となると考えられる。また、自分の身体へと意識を集中していくことで、他者から見られている身体への意識が軽減され、動きの出来栄え・外見的な形を重要視しないといった特性により、学習者のダンスにおける理想の自己像そのものを変化させ得るとも考えられる。C. I. 指導事例では、学習者の、他者の身体に対する理解の深まり等が報告されている。このような C. I. の学習は、学習者へ、ダンスの新しいイメージや見方を提供し得る可能性があると考えられる。